The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	マーシャル諸島から太平洋を越えて : Robert Barclayの小説とKathy Jetnil-Kijinerの詩を中心に
Author(s)	小杉, 世
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 27-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62011
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

マーシャル諸島から太平洋を越えて

――Robert Barclay の小説と Kathy Jetñil-Kijiner の詩を中心に――

小杉　世

１．はじめに

3 月下旬、Teresia Teaiwa が他界した。筆者と同じ年生まれの詩人・文学研究者で、キリバス人の父親とアフリカ系アメリカ人の母親のもと、ハワイに生まれ、ニュージーランドのヴィクトリア大学ウェリントン校で文学を教えていた。オーストラリア在住の文化人類学者である妹 Katerina と Teresia の家族は、イギリスによるリン鉱石採掘のため、ギルバート諸島のバナバ島からフィジーのランビ島に移住させられたキリバス人たちの家系である。Teresia Teaiwa の 1996 年の論文 “bikinis and other s/pacific n/oceans” は、1946 年に核実験場であるマーシャル諸島ビキニ環礁にちなんで名づけられた水着の“bikinis”が目をくらませるような白人女性の黄金色に日焼けした健康的な身体の露出を想像させる一方で、被ばくしたマーシャル人たちの身体を見えなくさせることを皮肉に論じている。[1] Teresia Teaiwa は、本稿で論じる Bobert Baclay の小説 *Meḷaḷ: A Novel of the Pacific* (2002)[2] を ‘rare and precious gift to all humanity’ (208)[3]と評し、Kathy Jetñil-Kijiner はじめ南太平洋系の若い作家や研究者たちに影響を与えてきた。本稿は、クワジェリン島育ちでハワイ在住のアメリカ人作家 Robert Barclay の小説とマーシャル諸島出身の詩人 Kathy Jetñil-Kijiner の詩、および黒澤明の映画『生きものの記録』(1955) をとりあげ、かつて日本やアメリカによる植民地支配を受け、独立した現在も自由連合協定という名のもとに、実質的には国土の一部がアメリカの軍事支配下にあるマーシャル諸島のかかえる問題を、日本の戦後と現代にも照らして考察する。

２．マーシャル諸島と太平洋の軍事的背景

マーシャル諸島はキリバス共和国などと共にミクロネシアに位置し、過去にはドイツ、日本、アメリカなどの植民地支配を受けた。日本は第一次世界大戦においてドイツ領であ

---

[1] Teresia K.Teaiwa, “bikinis and other s/pacific n/oceans,” *The Contemporary Pacific*, vol. 6, no. 1, Spring 1994, pp.87-109.
[2] Robert Barclay, *Meḷaḷ: A Novel of the Pacific*, U of Hawai‘i P, 2002.
[3] Robert C. Kiste が書評 “*Meḷaḷ : A Novel of the Pacific*,” *The Contemporary Pacific*, vol.16, no.1, 2004, pp. 208-11 で引用している(208 頁参照)。

ったミクロネシアを占領し、南洋庁をマーシャル諸島のヤルート環礁ヤルート島にも設置した。当時、日本はマーシャル人にとって、ヤルート環礁のコプラをよい値で買ってくれる貿易相手であった。南洋貿易株式会社の発展により、多くの日本人がミクロネシアに移住する。1931 年の柳条湖事件を機に満州を占領した日本は、1933 年、国際連盟脱退の意思を表明し、アメリカとの対戦に備えて、本来は軍事施設を設置することができない信託統治領を軍事基地化していった。[4] 第二次世界大戦では、日本軍基地のあったクワジェリン環礁をはじめとするマーシャル諸島の島々は、ほかのミクロネシアの島々と同様に、アメリカ軍と日本軍の間の激戦地[5]となり、マーシャル人もまきこまれ犠牲となった。

嘉手苅林昌の沖縄民謡「時代の流れ」には、「唐(とう)ぬ 世(ゆー)から 大和ぬ世、大和ぬ世から アメリカ世、ひるまさ 変(かわ)たる 此(く)ぬ 沖縄(うちなー)」[6]という詞があるが、日本軍の支配からマーシャル諸島を開放するとしたアメリカは、戦後、マーシャル諸島を「信託統治領戦略地区」として、アメリカが核実験を行うための排他的な領域とする。1946～58 年までビキニ環礁で 23 回、1948～58 年にエニウェトク環礁で 43 回行われた実験のうち、なかでも 1954 年 3 月 1 日にビキニ環礁でおこなわれたブラボー実験は、第五福竜丸の被ばくによって、日本にも大きな影響を及ぼした。核実験場となったビキニ環礁とエニウェトク環礁からは、島民たちが移住を余儀なくされ、ビキニ環礁の住人は、その東にあるロンゲリック島に、ついでクワジェリン島の基地に移され、さらにキリ島に移された。移住先の島は、もと彼らが住んでいた環礁と環境が異なり、面積も狭く食糧が乏しかった。また、1954 年のブラボー実験の際に避難の対象とされず、被ばくしたロンゲラップ島の住民たちは、実験から 2 日後にようやく米軍によってクワジェリン島の基地に避難させられ、3 か月後には、マジュロ環礁の無人島エジッチ島へ、そこからさらにキリ島に移された。1957 年、ロンゲラップ島に帰還した島民たちは、第二次世界大戦後のように木々も一掃された故郷の土地[7]で暮らしはじめるが、残留放射能による健康被害をこうむり、1985 年にグリーンピースのレインボーウォリア号の助けをかりて、再び島を脱出、クワジェリン環礁メジャト島に移住した。彼らは未だに故郷の島に帰還していない。[8] 核実験のために故郷の土地から移動を余儀なくされたマーシャル人たちは、現在、複数の島に分散して住んでおり、Barclay の小説に描かれるクワジェリン環礁のイバイ (Ebeye) 島もその居住地のひとつである。

---

[4] ミクロネシアに気象観測所も配置していく。真珠湾攻撃はマーシャル諸島の気象観測データを基に行われた。豊﨑博光『マーシャル諸島核の世紀（上）』（日本図書センター、2005）、14 頁。

[5] アメリカによるクワジェリン環礁への空爆と戦艦からの 15,000 トンの爆弾を用いた砲撃については、Martha Smith-Norris, *Dominion and Resistance: The United States and the Marshall Islands During the Cold War*, U of Hawai‘i P, 2016, p.3 参照。

[6] 『沖縄島唄ベスト(CD)』（ビクターエンタテインメント、2005）解説書 3 頁。

[7] 次の引用のメジャト島在住帰島被ばく者の声を参照。「帰ったときココヤシもタコノキもパンノキの実もない・・・戦争の後（第二次世界大戦後）、みんなで木を育てたけれどまただめになった。」中原聖乃『放射能難民から生活圏再生へ――マーシャルからフクシマへの伝言』（法律文化社、2012）、10 頁。

[8] 中原聖乃『放射能難民から生活圏再生へ』（2012）参照。ロンゲラップ島の被ばく者たちの移動と避難先であるメジャト島における現在の生活圏再生の問題を詳しく論じている。

マーシャル諸島のアメリカにとっての軍事的重要性は、冷戦時代にいよいよ大きくなった。エニウェトク環礁は核実験の後、ミサイル実験にも使用された。[9] 1952 年の核実験では、エルゲラフ島が消えた(Smith-Norris 19) が、ミサイル実験でも、環礁北部のいくつかの島が標的になって、島ごと消えたという。[10] その後、ミサイル実験場はクワジェリン環礁に移され、1965 年にはクワジェリン環礁の「ミッド・コリドー」と呼ばれる一帯をミサイル実験場とし、一帯の島民たちをクワジェリン島のすぐ近くのイバイ島に強制移住させた。[11] イバイ島は核実験で故郷の島を喪失した人びとや、クワジェリン島の米軍基地での仕事を求めて、ほかの環礁から集まってきたマーシャル人たちで人口が過密になった島だが、ミッド・コリドー地帯からの移住者の居住環境はとくに劣悪であったという。[12] 1958 年に 1,284 人であったイバイ島の人口は、ミッド・コリドー地帯からの島民の移動後の 1967 年には 3,540 人に、さらに 1980 年には 6,169 人、1999 年には 9,345 人と増え続けている（*RMI Statistical Yearbook 2002*, p.15）。[13] 0.35 km^2 ほどの面積に 9000 人以上の人口が密集するイバイ島は「太平洋のスラム」と呼ばれ、1999 年時点での人口密度は約 26,700 人/ km^2、世界で最も人口密度の高い都市ムンバイの人口密度 20,694 人/ km^2 を上回る。[14]

1980 年代のレーガン政権時代には、アメリカの西海岸（カリフォルニア州バンデンバーグ空軍基地）からクワジェリン環礁の真ん中を標的として発射される大陸間弾道ミサイル (ICBM) を、ミッド・コリドー地帯にあるメイク島その他のミサイル発射場から迎撃ミサイル (ABM) を発射して、大気圏外で破壊するという「スターウォーズ作戦（SDI）」の実験が試みられた。中国やソ連からアメリカを目指して飛んでくるかもしれない大陸弾道ミサイルをアメリカ本土に影響のない遠い太平洋の真ん中で迎撃することを想定した実験である。弾道ミサイルのなかには弾頭に劣化ウランが使用されているものもあったと指摘されている。[15] 豊﨑によれば、1973 年に世界保健機構が発表したミクロネシアでの健康調査結果（1967～71 年）は「信託統治領内の病院で行われていた 328 例の白内障治療のうち、74%にあたる 244 例がマーシャル諸島（首都のあるマジュロ島とクワジェリン環礁イバイ島）の病院で行われた」と述べており、世界保健機構は「マーシャル諸島の白内障症状の多発

---

[9] Martha Smith-Norris は、1971～73 年にエニウェトク環礁では 12 回の化学兵器実験が行われていたことにも言及している。(*Dominion and Resistance*, 13.)

[10] 豊﨑博光『マーシャル諸島核の世紀（下）』（日本図書センター、2005）、31 頁。

[11] Martha Smith-Norris によれば、1965 年にミッド・コリドー地帯から移住させられた島民は合計で 1470 人くらいである（*Dominion and Resistance*, p.109）。

[12] 中原聖乃・竹峰誠一郎『核時代のマーシャル諸島――社会・文化・歴史、そしてヒバクシャ』（凱風社、2013）、149 頁。

[13] http://www.pacificweb.org/DOCS/rmi/pdf/YEARBOOK2002.pdf 参照。

[14] 2011 年の人口調査では、クワジェリン環礁全体の人口が 11,408 人で 1999 年より 500 人ほど増えていることから、イバイ島の 2011 年の人口はおよそ 1 万人弱と推定できる。*Republic of the Marshall Islands 2011 Census Report* (http://prism.spc.int/images/census_reports/Marshall_Islands_Census_2011-Full.pdf#search=%27marshall+islands+census%27), p.15. ムンバイの人口密度はウィキペディアを参照。ただし、ムンバイ中心部のスラムの人口密度はもっと高い。

[15] 豊﨑博光『マーシャル諸島核の世紀（下）』、195、256 頁。中原聖乃『放射能難民から生活圏再生へ』、143 頁。

は、クワジェリン環礁住民に対する超短波放射線の過剰な照射が原因と考えられる」と判断しているという。超短波放射線は、アメリカ本土からクワジェリン環礁に打ち込まれるミサイル弾道の追尾のため、クワジェリン島、メイク島などの基地から照射されていた。[16] クワジェリン環礁のミッド・コリドー地帯は、現在もアメリカの軍事要地であり、立ち入り禁止区域である。中原・竹峰は、『核時代のマーシャル諸島』のなかで、ネグリとハートの共著『帝国』[17] にふれ、《帝国》としての米国は、「力のみによっては存在不可能で、『正義』、『平和』といった装いをもった力を行使する能力に依存している」のであり、「マーシャル諸島にはこのような《帝国》が現れている」(245) と述べる。アメリカの《帝国》支配下にある太平洋の軍事事情は、本稿でとりあげる Robert Barclay の小説 *Meḷaḷ: A Novel of the Pacific* によく描かれている。また、Kathy Jetñil-Kijiner が "History Project" で引用する "for the good of mankind" (21)という言説は、そのことをよく表している。世界の「平和」を維持するためという《帝国》の言説は、湾岸戦争、イラク戦争、そして、現在も繰り返される。

Mark J. Rauzon は *Isles of Amnesia: The History, Geography, and Restoration of America's Forgotten Pacific Islands* (2016) において、アメリカの「帝国支配」下にあり、かつて軍事要地や資源搾取の場として活用され、その後、忘れ去られ放置された島々について記述している。英米の核実験場であったキリバスのクリスマス島、アメリカの核実験場・生物兵器実験場、偵察衛星の打ち上げ基地として、また、その後、ベトナム戦争ほかで使用された大量の化学兵器の保管庫[18]・化学物質廃棄施設[19]となり、空港が閉鎖され今は無人島となったジョンストン島などである。マーシャル諸島は現在もアメリカの重要な軍事的拠点であり、島の存在自体が「忘却」されることはないが、前田哲男著『棄民の群島』(1979) のタイトルが如実に示すように、そこに住んでいる人々が受ける影響は、核の問題にせよ、現在の環境問題にせよ、常に「忘却」される。その歴史を語り、呼び覚ますのが、次にみる Kathy Jetñil-Kijiner の詩である。

３．Kathy Jetñil-Kijiner の詩集――*Iep Jāltok: Poems from a Marshallese Daughter*[20]

マーシャル諸島出身の若手女性詩人 Kathy Jetñil-Kijiner が 2017 年 2 月に初めての詩集を出版した。Jetñil-Kijiner は、ハワイ大学で修士号を取得したのち、故郷のマーシャル諸島マジュロに帰り、高校教師をしながら、詩の創作ワークショップや、環境保全団体の NGO 活

[16] 豊﨑博光『マーシャル諸島核の世紀（下)』、92 頁。
[17] アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『帝国――グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』(以文社、2003)。「・・・＜帝国＞には平和が存在し、また＜帝国＞ではすべての人びとに対して正義が保証されるというように。＜帝国＞の概念は、社会の平和を維持しその倫理的真実を生み出す単一の権力として、比喩的にいえば、ただ一人の指揮者が指揮するグローバルなコンサートのようなものとして提示され・・・必要とあれば『正戦〔正義の戦争〕』を指揮することのできる不可欠の軍事力が授けられるのだ」(25)とネグリとハートは述べる。
[18] 日本の沖縄返還の際に米軍基地から搬出された化学兵器も保管されていた。同上、93 頁。
[19] Mark J. Rauzon, *Isles of Amnesia: The History, Geography, and Restoration of America's Forgotten Pacific Islands*, U of Hawai'i P, 2016, p. 141.
[20] Kathy Jetñil-Kijiner, *Iep Jāltok: Poems from a Marshallese Daughter*, U of Arizona P, 2017.

動などをしていたが、最近、マーシャル人である夫の仕事の関係と彼女自身の博士号取得のために、アメリカに移住した。マーシャル語のタイトル *Iep Jāltok* には “A basket whose opening is facing the speaker”と注釈がついているが、“iep”は編まれたバスケット、“jāl”は “to open”、“tok”は “facing for”で、「話し手に向かって開かれたかご」という意味になる。食べ物などの日常のものを入れるバスケットは、伝説にも登場し、島の食べものを盗みにくる巨人（デーモン）が人間に見つかって驚き、かごから落としたものが 5 つの島になるという話がマーシャル諸島の伝説にあり、ポリネシアのマオリの伝説には「知恵のかご」を天から持ち帰る話がある。過去から語り継がれた歴史の記憶、先祖から伝承された文化や遺産、さまざまな記憶がつまったバスケット、そのなかから詩が生まれ、編まれた詩集は、今度は読者に向かって開かれたかごになり、さまざまな記憶を提示する。この詩集の最初と最後には、バスケット形に文字が配列された詩が配置されている。筆者が Jetñil-Kijiner の詩にはじめて出会ったのは、YouTube にアップロードされた 2012 年ロンドンの South Bank Centre のロビーで撮影された詩の朗読パフォーマンス“History Project”の映像[21]であった。当時、まだ Jetñil-Kijiner のことを知らず、偶然出遭ったこの映像で、マーシャル諸島での核実験に対する「怒り」の声を表明しているこの若いマーシャル人女性に関心をもった。Jetñil-Kijiner はこれまで各地で撮影した朗読パフォーマンスを YouTube で発表し、また多くの詩をウェブで発信してきたが、今回、それらの作品が詩集としてはじめて出版された。

この詩集は、マーシャル諸島の伝説を扱った “IEP JĀLTOK”、過去の核実験をはじめとするマーシャル諸島の植民地化の歴史と現在も続く搾取や健康被害の問題を扱った “HISTORY PROJECT”、ハワイで暮らすマーシャル人が直面する問題をテーマとする “LESSONS FROM HAWAI‘I”、現在マーシャル諸島が直面している地球温暖化などの環境問題などを扱った“TELL THEM”という 4 部で構成されている。第 2 部の表題詩 “History Project”は、中学生のとき始めたマーシャル諸島の核実験の歴史のリサーチ、「2300 万ドルの見舞金を口につめられ」沈黙させられた人々の声を拾おうとしたそのプロジェクトについて語り、実験用のヤギには同情するが、被ばくしたマーシャル人を見ようとしないメディアを痛烈に批判している。また、同じ第 2 部におさめられた“Fishbone Hair”は、半世紀以上を経た今もなお続く健康被害の現状を、白血病で亡くなった幼い姪にささげた詩の形で訴えかけ、「サンゴ礁を食う巨大な魚」を女たちが髪で編んだ網でとらえたというグアムのチャモロの伝説にふれて、島の存続を危うくする過去の核実験や現在の地球温暖化の問題に立ち向かう現代のマーシャル諸島の女性たちの姿を重ねている。[22] 第 4 部の“Dear Matafele Peinem”（2014 年 9 月に UN Climate Summit で朗読した娘に捧げる詩）にも、この「サンゴ礁を食う巨大な魚」は、「グローバル企業の貪欲な鯨」 (“greedy whale of a company” 71)という比喩に形を変えてあらわれる。「いつか潟湖がおまえを呑み込み(devour)、パンの

[21] https://www.youtube.com/watch?v=DIIrrPyK0eU 参照。

[22] 小杉世「環境芸術と政治――鉱山開発、エコテロリズム、地球温暖化、非核南太平洋」（『ポストコロニアル・フォーメーションズXI』大阪大学言語文化研究科、2016、15-26 頁）第 8 節で、Kathy Jetñil-Kijiner の“Fishbone Hair” ほかの詩の朗読パフォーマンスを論じている(26 頁)。

木の根っこをしゃぶり、島の骨をかみ砕いて、おまえは根なし草になり、故郷はパスポートに記されるだけの国になるだろうと男たちはいうが、母さんは誰にもおまえを食わせはしない」と娘に語り、子供たちを “climate refugees” にさせないという決意を表明する。*Isles of Amnesia* で、生物学者の Mark J. Rauzon は 1981～82 年のエルニーニョ現象が、クリスマス島の鳥の生態に深刻な影響を及ぼした(69) と述べるが、マーシャル諸島もまた、地球温暖化現象の如実な被害を被っている太平洋諸島国家のひとつであり、植民地支配、戦争、核実験、そして先進国の経済活動の発展と生活の便宜さの影で生まれる環境問題の影響をもっとも目に見える形で受けているグローバス・サウスの諸地域のひとつである。

詩集の第 2 部におさめられた“Hooked”は、本稿の第 2 節で見たような、日本軍占領下のマーシャル人たちが第二次世界大戦中におかれた状況にふれ、その後のアメリカによる支配のなかで生じた食生活の変化が、現在、ミクロネシアで問題になっている過度の「肥満」やそれに起因する病気に結びついていく様子が語られる。

爆弾の雨が　銀色の散弾の残骸の水たまりをつくり
かつて家屋があった場所が　銀色の破片と焼け焦げた
日本人とマーシャル人の死体で覆われるのを見たあとでは、

兵士たちが 逃亡した男を　裏切り者と責めて
その妻の両耳を　銃弾で撃ち放すのを見たあとでは

村長が腕を縛り上げられ　残り少ないココナツを盗んだと
激しく殴られるのを見たあとでは

漁が禁じられ、こっそりと夜に　海に出て
禁じられたかぎ針の形の三日月がかかる空のもと　息をひそめて
釣り糸を指の間にしっかりと 握っていたあの夜のあとには

それさえも難しくなって　こっそりと釣った魚を求めることもあきらめ
子供たちが やせ細って あばら骨の列が肌の下にグロテスクな笑い顔の
ように透けて見えるようになったあとでは

これらすべてを見たあとで
アメリカ人が与えてくれた 輝く塔のように積まれた食べもの
それは神からの恵みのようだった
何箱もの缶入りスパムソーセージや、香ばしいビスケット、チョコレート、
乾燥ソーセージ、キャンディー　そして　目の前に積まれた何袋もの米

――中略――

やがて息が苦しくなり 関節が痛み　店まで歩くのも困難になってもまだ
刺すような痛みが腕に走り　医者が足を切断する必要があると告げたあとでも

それでもなお　彼はやめられなかった
かつての禁じられた釣り針の幻想にいまだに悩まされて
指にからんだ油をきれいになめるのを

子供たちがやめてくれと　どんなに懇願しても
彼は聞かずに 医者がだめだという食べものを食べ続ける
せわしなく指を動かして

昔　餓えていたから　もう二度とひもじい思いはしたくないと[23]

Jetñil-Kijiner がウェブに掲載したエッセイによれば、詩集の表題となったバスケットは、2017 年のホノルル・ビエンナーレ芸術祭のために制作した作品にも登場する。展示室の床一面に椰子の葉で編んだかごを置き、かごのなかに過去の歴史の記憶であるマーシャル諸島での核実験の写真を入れるという演出が行われた。[24] ビエンナーレのために制作した詩の朗読パフォーマンスの録画映像では、Jetñil-Kijiner が椰子の葉を胸と指先に刺し、黒目を覆い隠す乳濁色のカラーコンタクトレンズをつけた姿であらわれ、腕や指に刺した葉から血が滴る様子や肌に刺した葉を引き抜くときの痛々しい様子がフォーカスされる（もちろんメイクで実際に肌に刺しているわけではないが）。[25] 朗読される詩には、ハワイに移住したマーシャル人が医療機関などで遭遇する差別や、ハワイに治療を求めてやってきた被ばく者のマーシャル人の話、医療保険制度改革法（オバマケア）の撤廃をかかげたトランプ大統領への批判などが語られる。[26]　また、「島の食べものを盗みにやってくる巨人[27]」を目撃した男が酋長に巨人の名前を告げると、海から巨人がやってきて男を食べてしまったというマーシャル諸島の伝説に言及し、巨人の名前（目撃した真実）を告げてはならないという教訓に、マーシャル人がアメリカ社会のなかで感じる圧力の象徴を見ている。

４．Robert Barclay の小説――*Meḷaḷ: A Novel of the Pacific*

アメリカ人の両親のもとに本土で生まれた Robert Barclay（1963―）は、父親が 1969 年にレーダー技師としてクワジェリン島に赴任、1972 年 9 歳のとき、母親と共にクワジェリン

[23] 日本語訳は筆者。スペースの都合により、もとの詩の改行を省略している箇所がある。
[24] https://www.kathyjetnilkijiner.com/ 参照。
[25] 肌に刺した椰子の葉は、椰子の葉の中肋(midrib)を胸の皮膚に刺して死者を悼むために刻む“scar tattooing”と呼ばれるマーシャル諸島の古い習慣を連想させなくもない。Dirk H. R. Spennemann, *Marshallese Tattoos*, Republic of the Marshall Islands Historic Preservation Office, 1992, p.118 参照。(Dirk H. R. Spennemann, *Tattooing in the Marshall Islands*, Bess Press, 2009, p.100 によれば、男性の刺青である。）この“scar tattooing” は Barclay の *Meḷaḷ* にも登場する(“a series of raised scars, put there by stabbing a palm leaf midrib thorough his skin and lighting it on fire. He did so in mourning for his people” 83).
[26] Jetñil-Kijiner はアメリカへの移住の手続きのさなかにトランプ大統領の就任が決まったことに対する衝撃と不安を語っている。https://www.kathyjetnilkijiner.com/ 参照。
[27] この伝説の巨人は島を襲う“king tide(津波)”などの表象であると同時に、現代史の文脈ではアメリカが重ね合わされる。

島に移住して、1981 年に高校を卒業後、1 年間、建設工事の仕事をして働き、その後、アメリカとクワジェリン島を行き来して 1980 年代を過ごした。ハワイ大学で創作の学位を取得し、現在はハワイに在住、ホノルルのコミュニティ・カレッジで教えている。[28]

Barclay の処女長編小説 *Meḷaḷ: A Novel of the Pacific* (2002)[29]は、1981 年の聖金曜日[30] のイバイ島とクワジェリン島の一日を描いたものである。この小説は、クワジェリン島の汚水処理施設で技師として働き、イバイ島に住むマーシャル人の中年男性 Rujen Keju とその二人の息子たち Jebro と Nuke[31] の物語、Jebro と同年代の 3 人のアメリカ人青年の物語など、人間の活動する現実の世界が非常にマテリアルな現実描写で描かれるのと並行して、人間の目には見えない「もう一つの次元」の世界、マーシャル諸島の伝説のトリックスターEtao や小人の妖精 Ṇoniep、亡くなった Ataji (Rujen の父親) の魂が宿る軍艦鳥、そして、イバイ島周辺の海を徘徊するデーモンたちの織り成す超自然の世界の物語が描かれ、それら二つの次元の物語が 1981 年 4 月 17 日という小説の現在時点において交錯する構成になっている。人間界とそれをとりまく超自然界の二つの異なる次元でおこる出来事は、両世界に共通して出てくる事象や言葉の何気ない重複がテクストに仕組まれることによって、巧妙に関連づけられている。西洋の文学用語ではマジック・リアリズムと呼ばれるが、亡くなった人の霊や超自然的な存在が人間たちをとりまいているという感覚は、先住民的な感覚からいえばごく現実の自然なものだろう。

小説の現在時は、ドナルド・レーガンが大統領（任期：1981 年 1 月~1989 年 1 月）に就任した 3 か月後、クワジェリン島のミッド・コリドー地帯では、第 2 節でふれたミサイル実験が展開されており、マーシャル人たちは立ち入り禁止区域が半分以上をしめる環礁内で漁場も制限され、大陸弾道ミサイルや気象観測ミサイルが上空を定期的に飛び交うなかで生活していた。Rujen の息子たちがボートでめざす祖父の墓のある故郷の島 Tar-Wōj もこ

---

[28] Barclay の伝記的情報は、2013 年 8 月と 2016 年 9 月の 2 回にわたる面会とその後の E メールによる対話に基づく。Barclay の父親は 2001 年に退職し、現在ハワイ在住、母親は 2008 年に癌で亡くなっている。Barclay は現在、地球温暖化をテーマにした空想科学小説を執筆中である。

[29] 小杉世「この世の最期のダンス？――Lemi Ponifasio の *Birds with Skymirrors* と太平洋の核文学」『ポストコロニアル・フォーメーションズⅧ』（大阪大学大学院言語文化研究科、2013、pp. 23-36）においても、第 5 節で *Meḷaḷ* を論じている(pp. 35-36)。この作品に関する先行研究はまだ少ないが、アメリカ人である Barclay のマーシャル人表象とデーモンの扱いを批判的にとらえた Simone Oettli-Van Delden, “Problematizing the postcolonial: Deterritorialization and cultural identity in Robert Barclay’s *Meḷaḷ*,” *World Literature Written in English*, vol.39, no.2, 2002, pp. 38-51、Delden に一部反論し、この小説を肯定的にとらえた Teresa Shewry, “Sea of secrets: Imagining illicit fishing in Robert Barclay’s *Meḷaḷ* and Rob Stewart’s *Sharkwater*,” *Journal of Postcolonial Writing*, vol. 49, no. 1, 2013, pp. 47-59 と同じく Shewry の“Utopia Hauted: Loss and Hope in the Nuclear Pacific”, *Hope at Sea: Possible Ecologies in Oceanic Literature*, U of Minnesota P, 2015, pp.147-175、放射能のオカルト性に注目し、ゴシック小説として本作品を論じた Hanna Straβ, “‘A Living Death, Life Inside-Out’: The Postcolonial Toxic Gothic in Robert,” *Globalizing Literary Genres: Literature, History, Modernity*, Routledge, 2016, pp. 228-240 などがある。

[30] Good Friday はキリストの受難と死を悼む復活祭前の金曜日で、1981 年は 4 月 17 日にあたる。

[31] Jebro は星にちなんで名づけられた。マーシャル諸島の伝承に登場する親孝行な末っ子の英雄の名前でもある。Nuke は核兵器にちなんで名づけられた。

のミッド・コリドーの立ち入り禁止区域にある。Rujen の妻 Iia は、ロンゲラップ環礁の出身で、9 歳のとき、ビキニ環礁で行われたブラボー水爆実験で被ばくし、クワジェリン環礁に避難してきた。放射性降下物が島に降った日、具合が悪くて家のなかにいた Iia は、急性放射線障害も比較的軽症で、当時子供だったほかの島民たちが後に甲状腺癌を発症していく[32]なか、医師には「幸運な例」と言われるが、被ばくから 8 年後の 1962 年、親族の反対を押し切って Rujen が彼女と結婚したあと、Iia は流産を繰り返し、1972 年 27 歳のとき、5 回目の流産で出血多量のため亡くなる。Rujen はある日、Iia が胎児を裏庭に埋めるところを目撃し、罪悪感にかられる。

> 流産について、イーアはほとんど語らなかった。妊娠していたかと思うと、急に姿を消してしまい、数日間妹のところに滞在して、帰って来たら、みんなわかっていた。ルージェンは、何があったか決して尋ねなかった。夫と妻の間の語られない言葉でもって、彼女がそのことにふれないでほしいと言っているように思えたからだ。・・・日の光のふりそそぐある午後に、ルージェンはイーアが跪いて台所の裏手の墓地の隅に穴を掘っているのを見た。その当時、墓地はまだ今ほど混み合っていなかった。視界の外にあったもの、心のなかから追い出していたものが突然現実のものとなって目の前にあった。そして過去にその痛みを拒絶してきたこと、その痛みを妻だけに負わせていたことが、ほとんど犯罪のように感じられた。・・・彼女の向こう側、海の上には、さかさまの虹のようなものが半分だけかかっていた。・・・まもなく彼女は太陽のような明るさを取り戻して、その明るさは破壊しがたい強さをもっていた。そのうち、ヌークが生まれた。・・・でも、最後の流産は多量の出血をもたらし、ヌークが三歳のとき、イーアは亡くなった。ルージェンはその日、妻と少しの間ひとりでいたいといった。そして彼女の生命のない手をとって、すまないと妻にいった。最初は自分の精子が毒されていると思いこんだが、毎年、ブルックヘブン国立研究所の医師たちがやってきては妻を船に連れて行って検査し、採血して、一度などは胸から小さな骨のサンプルをとったりしたので、そのうちわかった。でも、医者たちは、イーアは子供を産もうとしないほうがよいなどとは決して言わなかった。医者たちは、イーアは幸運な例だといった。・・・（島民を避難させなかったのは）意図的だったのだという噂を聞いたことがある。爆弾の影響を知りたかったからのだと。しかし、ルージェンもイーアもそんなことは信じなかった。どうして、信じられようか。・・・マーシャル人にそんな思いをさせて、世界を平和と善意と自由で満たそうとするなんて、あの人たち（アメリカの軍関係者たち）は正気じゃなかったにちがいない。（20-22、日本語訳は筆者）

Iia の被ばくとロンゲラップ島民が実験材料にされたという見方については、後に 18 歳の長男 Jebro の回想のなかで、より現実的な言葉で語られる。Jebro の父方の故郷は Tar-Wōj

[32] ブルックヘブン国立研究所の調査では、1966～69 年に甲状腺癌 19 人と甲状腺異常 18 人が見つかり、被ばく時に 10 歳以下だった子供は 77.3%の発症率であったという。中原聖乃『放射能難民から生活圏再生へ』、15 頁参照。

だが、マーシャル諸島は母系社会であるため、Jebro はイバイ島には土地権をもたず、彼が権利をもつのはロンゲラップの母親の故郷、ビキニ環礁とエニウェトク環礁での核実験で汚染された島であり、一生そこに足を踏み入れることがあるかどうかさえわからない。Jebro は、エニウェトク環礁エルゲラフ島(Elugelab)の出身の男が子供のとき、1952 年のアイビー作戦マイク実験で、故郷の島が深さ 200 フィート、円周 1 マイルのクレーターになったのを知ったとき、水爆で「自分の魂の一部も破壊された」(80)と語っていたのを回想する。

Rujen Keju の父親 Ataji は、伝統主義者で日本人ともアメリカ人とも闘ってきた男として描かれる。Simone Oettli-Van Delden は、Barclay が当時の抵抗運動を全く描いていないと批判するが、注意深く読めば、背後にある歴史的事実を想起させるような描き方がされている。小説中でさりげなくその名が言及される Handel Dribo は、マーシャル諸島の活動家で、第二次世界大戦を生き延びたクワジェリン環礁の土地所有権者の一人であり、ミッド・コリドー地帯の島々からの島民の強制移住に対する抗議運動として、1976 年、1978 年、1979 年に、クワジェリン島のほか、ミッド・コリドーに位置する立ち入り禁止区域のオムレック島、ロイ・ナムール島などで、“sit-in” や “sail-in” と呼ばれる抗議運動を行っていた。[33] 1969 年から繰り返し行われた一連の抗議運動のなかで、“Operation Homecoming”と呼ばれた大規模な抗議活動（迎撃ミサイル基地のあるメイク島を占拠した）は、この小説の設定されている 1981 年の翌年に行われている。[34] これらの一連の抗議運動を Barclay は記憶しており、クワジェリン島の占拠のときに、一人が警官に殴られるのを見たという。Rujen Keju の父親 Ataji は、Handel Dribo などと共に抗議活動を行ってきた人物として描かれる。「一度、クワジェリン島の基地に侵入して、警官に殴られ、それ以来、片方の目がいつも赤かった」(23) という。この Ataji の名は、当時、上院議員でマーシャル人たちにとってのスポークスマンでもあった Ataji Balos を連想させる。[35] ただし、Barclay は政治小説としてこの小説を書かず、歴史上の抗議運動の詳細を描くことはなく、その活動のクライマックスとなる 1982 年の前年に小説を設定することで、あくまでフィクションの形で、Rujen の父親 Ataji をマーシャル人一個人の物語として描いた。しかし、そこには Rujen がクワジェリン島からの帰りの水上タクシーのなかで聞くマーシャル人たちの会話にも垣間見られるように、人々の間にこの時代の運動の胎動のような emergent な感情が存在していることを示している。また、歴史の表舞台の活動よりも、むしろ、誰にもその苦しみを告げずに亡くなった Rujen の妻 Iia の声にならない沈黙のほうに焦点をあてている。

伝統主義者で活動家でもあった父親と折り合いが悪く、Ataji を“trouble maker”と呼び、自らを“a strong believer in progressing to join the modern world” (92)とみなす Rujen は、クワジェリン島の下水道処理施設で第一級技師として働き、アメリカ人の通うクワジェリン島のカトリック教会でただ一人のマーシャル人の案内人 (usher) であることを誇りに思っている。

[33] 豊崎博光『マーシャル諸島核の世紀（下）』、194-95 頁。
[34] Simone Oettli-Van Delden は“Operation Homecoming”を小説の現在時と同年に起こったこととしているが誤りである。
[35] Barclay も Ataji Balos のことを念頭に置いていたという。

一方、Jebro は祖父 Ataji から父親が教えてくれなかったすべてのこと（釣りやカヌーの扱い方など）を教わり、Ataji が存命中繰り返しそうしたように、アメリカの「法」を破り、故郷の島へ行こうとする。しかし、その Jebro も、週明けには父親と同じ職場で働きはじめることになっており、二つの世界のはざまで生きることの困難を感じている。故郷の島を見たことがない 12 歳の弟 Nuke を連れ Tar-Wōj にボートで遠出した Jebro は、弟に「カメは水のなかで生活するが、水中では息ができない。・・・まるでどっちの世界で生きるのかを決めかねているようだ。カメとして生きるのは楽じゃないな」(129) という。

小説のタイトルは、マーシャル語で「デーモンたちが徘徊するところ（人間の住めないところ)」という意味で、昔からある様々な病疫や植民地支配のもたらした悪疫（疫病、核汚染やその他の環境汚染、社会の疲弊）を象徴する多数のデーモンたちがこの島で亡くなったマーシャル人たちの魂 (“the stolen souls of Ebeye” 283) や自殺した少年たちの魂、被ばくした島民が産んだ骨のない子供たち(“Jellyfish babies” 283)の魂を盗み、虜にしている。小説の最後では、マーシャル諸島の伝説のトリックスターEtao が米軍のミサイル弾頭の軌道を変えて、デーモンたちと闘い、囚われていた魂たちを解放する。

この小説には青少年の自殺の多さなど、イバイ島の社会が抱える問題が言及される。イバイ島の多くの漁船は釣りに出ることもなく放置されたままであり（イバイ島の周辺のラグーンは汚水の垂れ流しで汚染されており、クワジェリン環礁の多くの海域が立ち入り禁止区域となっている)、釣り船のいくつかは、クワジェリン島とイバイ島を往来する水上タクシーになっている（クワジェリン島にはアメリカ人しか居住できず、クワジェリン島で働くマーシャル人たちは午後 6 時のフェリーでイバイ島に帰らなくては “trepass”の罰金を払うことになる)。先祖は優れた航海者であったマーシャル人の若者たちは、親たちから伝統的知識を受け継ぐこともなく、生活は輸入食品と補助金に頼って、多くのマーシャル人は仕事につけず、少年たちは行場のなさからタバコ、麻薬、アルコールに逃げ場を見いだす。Jebro は少年の自殺の多さについて次のように語る。“we try to copy the Americans, but we can never have the life Americans have. Marshallese boys are in a hole between two worlds, and maybe the rope is a way for many of them to get out.” Jebro 自身はこの「穴」から抜け出す方法を見いだしている。自殺しようとしたことがあるかと尋ねる弟に Jebro は、“One time I was going to, but when I was trying the noose, I discovered a great fishing knot”(131)と答える。左手の 6 番目の指（爪のない余分の小指）を「魔法の指」と呼び、「水につけて動かすと魚を釣れる」(4)と自慢する Jebro は、トリックスターの Etao と同様、状況を逆転させる力をもっている。

小説の「もうひとつの次元」の世界では、マーシャル諸島の創世神話の始まりから、トリックスターEtao の島めぐりの冒険が語られ、Etao と Jemāluut（マーシャル語で「虹」）の兄弟の航海が、人間界の Jebro と Nuke の航海と並行して描かれる。伝説の語り直しのなかには、明示的ではないながら、現代の歴史的な物語が重ね書きされている。ミクロネシアの神話に登場する Etao は、ポリネシア神話の Maui に近いトリックスターだが、人間に恩恵

をもたらしもするが、そのいたずら好きは度を越していて、ウミガメの精の魔女から得た魔法の力を自分の楽しみのために使う。訪ねた島々で、Etao は火を知らない人間に火を与えるが、そのコントロールの仕方を教えない。村では火事が起こり、「赤い悪魔」が家を食い荒らすのを見て、人々が逃げ惑う姿を Etao は楽しんでいる。キリバスの Butaritari 島では、“earth oven” のなかに入って魔法で抜け出し、かわりに多くの食糧を魔法で用意するというトリックを演じてみせて、まねをしようとした酋長を “earth oven”で蒸し焼きにしてしまう。Etao は酋長に“earth oven”のなかに入るようにそそのかし、「これはエニウェトク環礁(Enewetak)で学んだトリックだ」(69) という。この伝説が 1981 年の人間界の物語と並列して描かれることで、エニウェトク環礁の名は、当然のことながら、核実験場となった環礁という連想が働くのであり、村人たちだけでなくデーモンたちさえも尻込みする蒸し焼きになった酋長のふくれあがった死体のおぞましさが、通常の伝説の語りよりも強調して描かれるのも意図的だろうか。トリックスターの Etao は創意工夫の知恵と同時に、人間のもつ愚かさや残酷性を体現する存在になっている。キリバスで酋長を蒸し焼きにした後、Etao はアメリカに行く。アメリカのバスケットボールチームのユニフォームを着てアメリカから帰ってきた Etao に Ṇoniep は、「爆弾の作り方をアメリカ人に教えたのもおまえじゃないのか」というが、実際にマーシャル諸島の伝説のなかには、Etao のアメリカ行について語るヴァージョンがいくつかあって [36]、そのひとつとしては、Etao がアメリカ人にだまされ、瓶詰めになって、出してもらうかわりに飛行機や爆弾の作り方を教えたという現代版がある。[37] 人類に火をもたらし、網で太陽を捕らえてその運行を遅らせたポリネシア神話の Maui がそうであるように、Etao のもたらす「火」もテクノロジーや近代性と結びつくものであり、その力をどうコントロールするかが世界の破壊か存続を決めることになる。

５．黒澤明『生きものの記録』(1955)

マーシャル諸島のビキニ環礁で行われた 1954 年 3 月 1 日のブラボー実験での第五福竜丸の被ばくは、広島・長崎の被ばくから 10 年が経たないうちに再び日本人が被ばくした事件として、大きく日本の社会を揺るがした。その翌年に封切られた黒澤明監督の映画『生きものの記録』[38]は、当時の社会が感じていた不安をいち早く形にしたものといえるだろう。1952 年 11 月 1 日にアメリカがマーシャル諸島のエニウェトク環礁で人類初の水爆実験（アイビー作戦マイク実験）に成功し、同年 10 月 3 日にはイギリスがオーストラリアで原爆実験に成功、翌年 1953 年にはソ連が水爆実験に成功した。そして、朝鮮戦争は 1953 年 7 月

[36] Daniel A. Kelin, *Marshall Islands: Legends and Stories*, Bess Press, 2003.
[37] Laurence Marshall Carucci, “The Source of the Force in Marshallese Cosmology,” *The Pacific Theater : Island Representations of World War II*, 1989 (http://hdl.handle.net/10125/25824). Greg Dvorak, “ ‘Marshall Islands’: Making Marshallese Masculinities between American and Japanese Militarism,” The Contemporary Pacific, vol.20, no.1, 55-86 でも引用されている。
[38] 第五福竜丸平和協会編『第五福竜丸は航海中――ビキニ水爆被災事件と被ばく漁船 60 年の記録』（現代企画社、2014）も、「繰り返される核実験への不安は、黒澤明の劇映画『生きものの記録』、亀井文夫の科学ドキュメンタリー『世界は恐怖する』にも登場」(175) すると述べる。

の休戦協定で一旦終結するが、休戦協定を破れば核兵器を使用するという意思を当時の米国大統領は表明していた。[39] そんななかで起こった 1954 年 3 月のブラボー実験による第五福竜丸の被ばくと「原子マグロ」の大量投棄、そして、その半年後に乗組員の久保山愛吉が亡くなり、太平洋の遠いところで行われている実験の影響が日本の国内においても他人事ではなくなった。ビキニ水爆実験のニュースを聞いた早坂文雄（この映画の音楽監督）が「こう生命をおびやかされちゃ、仕事は出来ないねえ」といった言葉に衝撃を受け、黒澤明監督はこの映画の作成を決意したという。[40] 結核を病み死と隣あわせで生きていた（映画の制作途中で他界する）早坂文雄は、当時の状況をより鋭敏に感じていたのだろう。

朝鮮特需で日本の鋳物工場が潤ったころ、その鋳物工場の経営者であるこの映画の主人公の老人は、南方からの放射能（エニウェトク環礁でのアメリカ初の水爆実験か）を避けるため、秋田県に土地を買い、奇妙な地下家屋の建設を始めるが、その数か月後には、今度は北方からの放射能（ソ連の水爆実験か）が同地に及ぶという新聞記事を見て、工事を中止し、「もはや地球上で安全に暮らせる土地は南アメリカだけしかない」と考え、全財産をなげうち近親者全員のブラジル移民を独断的に計画して、その結果、家族が裁判所に老人を「準禁治産」に処する申告をする。主人公の妾の父親は、すでに精神のまいっている主人公の老人の恐怖心に追い打ちをかけるように、キノコ雲の写真の載った新聞記事（「恐るべき水爆の実相――人類皆殺しの兵器、日本は放射能の谷間」）を見て、次のように言う。

> この放射能ってやつは、水爆が支那に落ちてもアメリカに落ちても、ロシアに落ちても、日本の上へ流れてくるんだそうですね。私らにはよくわかりませんが、なんかこの気流の関係でそうなるんですってね。つまり、日本はその放射能が流れて集まってくる谷間みたいなもんですわな。すると、その谷間に住んでいるわれわれ生きものは、一体どういうことになるんでしょうかね。（傍点は筆者）

このせりふは、核競争を繰り広げるアメリカとソ連のはざまに位置した当時の日本人が感じていた不安をあらわしている。ソ連・中国とアメリカの狭間にある、吹けば飛ぶような国、日本。同時にこのせりふには、当時の研究者たちが明らかにしていた放射性降下物の流れについての情報が反映されており、現在では、さらに成層圏を巡回する放射性降下物が対流圏に落ちていく地点が地球上におもに二つあって、そのうちのひとつは日本の上空であることがわかっている。[41] 後に米国エネルギー省が公表した放射性降下物の測定地図

---

[39] この歴史背景は、東宝株式会社 2002 年発行の DVD『生きものの記録』の解説書の広瀬隆「恐怖の時代」22 頁参照。

[40] DVD『生きものの記録』（東宝株式会社、2002）の解説書 48 頁参照。

[41] 青山論文 434 頁の放射性降下物のグローブ状の経緯度分布図 (Fig.1) 参照。日本列島は高濃度地点に位置している。Michio Aoyama, Katumi Hirose and Yasuhito Igarashi, “Re-construction and updating our understanding on the global weapons tests ^{137}Cs fallout,” *Journal of Environmental Monitoring* 8, 9 March, 2006, pp. 431-438 (DOI: 10.1039/b512601k). 青山道夫氏によれば、1955 年当時は、世界で 2 か所の極大があることは理解されておらず、日本周辺に多いとだけ理解されていたと推測されるという。黒澤のこの映画では、登場人物の歯科医師が竹谷三男編『死の灰』（岩

では、1954 年 5 月 17 日に日本列島がすっぽり放射性降下物の高い分布地図のなかに包み込まれている[42] のであるから、この主人公の老人の感じていた恐怖は生物本能的に正しいともいえる。しかし、家族に決心をさせるため自分が苦労して築いた工場に放火してまで、一族を「唯一安全な場所」（だと彼が信じている）ブラジルへ移民させようとする常軌を逸した行動により主人公は「狂人」扱いされ、最後には本当に「狂って」しまった主人公が、精神病院の病室で、見舞いに来た歯科医師に次のように語る。

> よくおいでなすったな。ここならもう大丈夫じゃ。ご安心なさい。ところで、その後、地球はどうなりました？・・・人はまだ沢山おりますか？**［見舞人がうなずく］**え？そりゃ、いかんな。・・・早く逃げないとえらいことになるぞ。なぜそれがわからんのかな。早く、ここへ、この星へ・・・。**［窓の外の夕陽を見て］**ああっ、地球が燃えとるぞ！・・・あぁ、とうとう地球が燃えてしまった。（傍点と太字ト書きは筆者）

主人公は、自分がどこか安全な他の惑星に無事避難したと考えているのだが、上の傍点の「ここ」というのが文字通りには精神病院を指すのは皮肉である。主人公が入院している精神病院の医者は、この老人を見ていると、どちらが狂っているのか不安になるのだという。地球上のすべての人々が、この老人のように冷戦時代の世界の「狂気性」を精神に異常をきたすほどまっすぐに見つめたならば、今頃、地球は実に安全な場所になっていたのかもしれない。第五福竜丸事件は、日本の反核運動を生み出したが、アメリカによる見舞金が支払われると、マグロの検査は 1954 年の 12 月に打ち切られ、以降は水揚げされた魚はすべて「安全」なものとして市場に出回り、食卓にのぼった。そして、皮肉なことに、1955 年には日本の国会で初めて原子炉予算が承認され、日本は原発開発に乗り出し、「核の平和利用」の夢がその後の高度成長期を支えていくことになる。

６．おわりに

本稿は、冷戦期における太平洋の核による軍事支配と現在も続く「コロニアリズム」の問題、そして現在、太平洋国家がかかえる環境問題について、マーシャル諸島をテーマとした小説、詩などをもとに論じた。移民の制限、医療ケアの縮小をめざし、パリ協定からの脱退をほのめかすトランプ大統領の存在は、現在、地球温暖化の深刻な影響を受けているミクロネシアの諸島国家や、マーシャル諸島からハワイやアメリカ本土に移住する人々にも波紋を及ぼしている。マーシャル諸島に関しては、まだ現地調査をする機会がなかったが、今後、イバイ島の現在の状況を視察すると同時に、首都マジュロにおける環境保全団体などの芸術を媒体とする活動などについても調査して行きたい。

波書店、1954）を読んでいる場面がある。また、三宅泰雄『死の灰と闘う科学者』（岩波書店、1972）には、ソ連の核実験の灰は対流圏の気流の流れにのって 3 日くらいで日本に到達し、ネバダの実験の灰はジェット気流にのって約 2 週間で北海道に到達したことがわかっているとある。

[42] この米国エネルギー省の機密文書は、ドキュメンタリー映画『放射線を浴びた X 年後』(2012) の上演パンフレット 9 頁に引用されている。